

# 特別支援学級担任等への支援の充実に向けて ～ホームページでの情報発信を通して～

島根県教育センター 教育相談スタッフ 特別支援教育セクション 共同研究

---

## 【 要 旨 】

令和元年度から2カ年計画の調査研究である。小・中学校の特別支援学級担任等への支援の充実を主な目的とし、ホームページを通じて発信する情報を、アンケート調査や関係機関からの情報収集を基に検討し、作成、検証するものである。1年次の研究内容は主に、ニーズによる情報の作成とその周知、2年次は、特別支援教育の職務研修受講者からの作成した情報に対する評価と改善の実施、有効性の検証である。作成した情報が、特別支援教育に携わる人々のツールとして、基礎の学びや確認として活用してもらえるように取り組んできた。

【キーワード：特別支援教育 特別支援学級 特別支援学級担任 特新担 ホームページ】

---

### 1. はじめに

島根県教育センター（以下「当センター」という）は、初めて特別支援学級担任または通級指導教室担当となった教員の職務研修として「小・中学校特別支援学級、通級指導教室新任担当教員研修」（以下「特新担」という）を実施している。

特新担受講者は、毎年100名を超える人数であり、年間2回（4月、11月）の研修を通じて、特別支援教育に関する基本的な事項や学級経営に関する担任の役割、児童生徒とのかかわり等多くの内容を学ぶ機会となっている。また、各教育事務所の特別支援教育担当指導主事は、学校訪問指導を実施したり、平成29年度から各教育事務所に配置された特別支援教育支援専任教員（以下「特専」という）は、学校からの要請を受けて即座に関わったりと、受講者等の日々の教育実践を支えている。

傾向として、例年第1回の研修後のアンケートでは、「研修実施をもっと早い時期にしてほしい」という意見が複数ある。また対称的に、「4月の段階ではまだ児童生徒の様子が分からない」という意見も聞かれている。どちらにしても、子どもとの出会いの前に、担任としてできることを早くから準備しておきたいという思いがあるのではないだろうか考える。校内で児童生徒の実態を引き継ぐことが可能な場合は良いが、相談する人がいない場合の不安はとても大きく、研修でのつながりがその後の不安の解消（安心）に影響すると感じる。

このような状況があり、研修の充実同様に、特別支援教育の学びの窓口として、常に当センターホームページに、必要な情報を用意しておく環境を整えたいと考えた。

なお、本研究では、小・中学校の特別支援学級担任はもちろん、通級指導教室担当教員や通

常の学級担任も含め、支援を必要とする児童生徒に関わる全ての人活用できるという観点から、「特別支援学級担任等への支援の充実に向けて」という表現でテーマを設定した。

## 2. 研究の目的

ホームページでの情報発信を通して、特別支援学級担任等への支援の充実を図る。

## 3. 研究の計画

### 【1年次】

- 1 特別支援学級担任のニーズの把握の方法を検討し実施する。
- 2 ニーズに対応する情報の作成を行う。
- 3 作成した情報の周知を図り、2年次の研究内容と方法を明確にする。

### 【2年次】

- 1 情報活用を行い、情報の評価を得る。
- 2 評価された事柄について、必要な対応を図る。
- 3 情報作成を継続して行き、ホームページにアップロードする。

## 4. 研究の方法（1年次）

- (1) 特別支援学級担任等のニーズの把握を目的とし、研修受講者へのアンケートを実施する。また、研修時における受講者の状況や研修に関わった講師等からの意見等を参考に、作成する情報の内容を検討する。
- (2) 1年次の情報の作成にあたり、具体的な事例（場面）の説明、一問一答形式（Q & A）等、分かりやすさと使いやすさを検討し、関係機関と連携をしながら、試案を作成し、ホームページへのアップロ

ードを行う。

- (3) 2年次の研究内容である、特別支援学級担任等の情報活用状況の検証と改善のために、年度内に作成した情報の周知を図る。

## 5. 研究の内容

### (1) ニーズの把握

ニーズの把握のための方法を検討した。その結果、以下の二つの方法で、ニーズの把握と作成に向けた内容の整理を行うことにした。

#### 方法1

アンケート調査を実施し、その回答からニーズの整理をする。

○対象：研修受講者

- ① 特新担受講者
- ② 特別支援学級担任3年目研修（以下「3年目研修」という）受講者

○実施計画

対象	実施時期 (質問)	研修受講前 (年度当初の不安)	半年経過 (知りたいこと)
① 特新担	4月中旬		8月
② 3年目研修			

#### 方法2

研修の講師による振り返り用紙の記述内容や情報交換を手段とし、研修受講者のニーズや状況を把握する。

○実施時期

手段	対象	特新担講師	特専
研修振り返り用紙		研修後	なし
情報交換		なし	8月、2月

- ・特新担の講師（特別支援学校、指導主事）からの情報収集は、主に紙面による振り返り用

紙に記入されている内容を参考にする。指導主事に関しては、情報共有を図りながら必要に応じて、時間設定を行う場合もある。

- ・特専との情報交換会は、年間2回を予定し、学校訪問などの現状を把握する機会とする。

### 方法1によるアンケートの実施と分析

#### ア 特新担受講者への事前アンケート結果

今年度の特新担第1回は、東部会場：4/25（木）、西部会場：4/24（水）であった。年度はじめの研修であり、各学校からの職務研修対象者の提出締め切りを待ち、直ちに受講対象者の確認作業を特別支援教育課、各教育事務所と連携して行っている。今年度の場合、研修者135人を対象として、事前アンケートを実施し、全ての受講者の回答を得た。

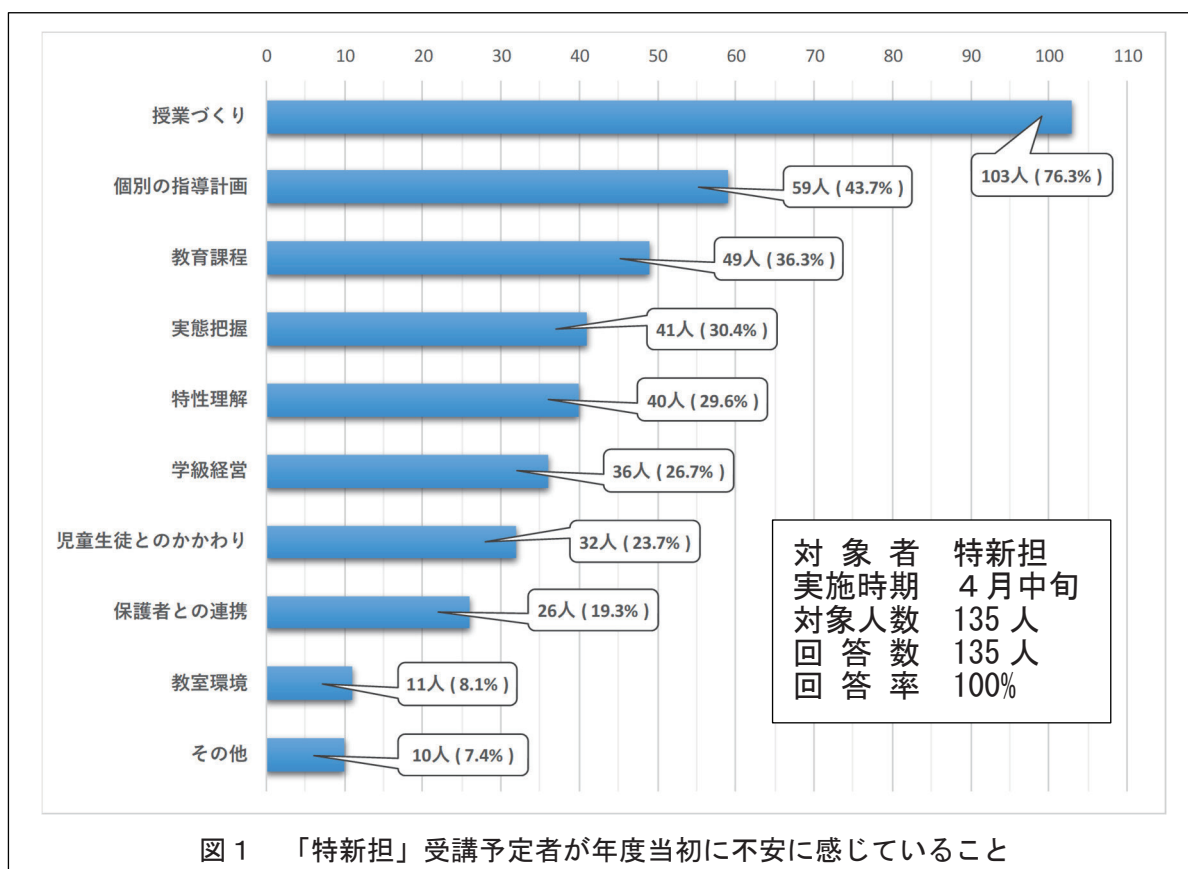
事前アンケートは、受講者の状況（教職経験年数、担当する学級の障がい種、教育課程）と特別支援学級担任として直面する不安を把握

することを目的としている。知り得た状況は、研修当日のグループ協議や講義等で扱うことにより、より受講者のニーズに対応しようとするものである。本研究を進める上では、アンケート結果からの「不安」について、重要なニーズとしての価値付けをした。10項目の中から不安に感じていることを複数選択可能として100%の回答でまとめたものが図1である。

回答された項目の結果を踏まえ、年度当初に抱える特別支援学級担任等のニーズの傾向を見ることができた。

結果から考えたことを以下に示す。

- ・授業づくりの回答率が76.3%と1番高い結果となった。日々の授業をどう計画したらよいかという悩みがあった。
- ・続いて個別の指導計画で、43.7%であるが、授業づくりとの関連が密接な項目として捉えられる。



- ・教育課程については、36.3%である。通常の学級における教育課程との違いがあり、特別な教育課程の理解の必要性として回答があったと感じられる。具体的には、自立活動や各教科等を合わせた指導等の理解と関連している。
- ・実態把握、特性理解、学級経営、児童生徒とのかかわり等、教育活動を行う上での基盤となる、特別な配慮を必要とする児童生徒の見

方、捉え方についての不安項目が続いた。

イ 2つの研修受講者を対象としたアンケート結果（調査名：特別支援教育のニーズの把握に関する調査）

8月に2つの研修（特新担、3年目研修）の受講者（計168人）を対象に「特別支援教育のニーズの把握に関する調査」を実施した。

前述アのアンケート同様に選択する方法で

表1 令和元年度「特新担」及び「3年目研修」の受講者への調査・研究アンケート集計結果（その1）

質問① 下の表にある項目の中で、今後知りたい、あるいは参考にしたい項目に○印をしてください。（5つ以内）

項目	①特新担 対象134人 回答97人 回答率 72.4%	①で 回答に 占める 割合(%)	①での 順位	②3年目 研修 対象34人 回答31人 回答率 91.2%	②で 回答に 占める 割合(%)	②での 順位	①+② 対象168人 回答128人 回答率 76.2%	①+②で 回答に 占める 割合(%)	①+② での順位
各教科等を合わせた指導※	26※	70.3※	1※	6※	54.5※	2※	32※	66.7※	1※
自立活動	57	58.8	2	13	41.9	5	70	54.7	2
進路に関すること（学習・保護者連携）	44	45.4	3	15	48.4	3	59	46.1	3
教材・教具の工夫	32	33.0	4	20	64.5	1	52	40.6	4
障がい特性の理解	32	33.0	4	11	35.5	6	43	33.6	5
担任としての1年間の見通し	30	30.9	6	5	16.1	14	35	27.3	6
理解啓発（校内・校外・保護者）	18	18.6	10	15	48.4	3	33	25.8	7
子どもの見方、とらえ方	23	23.7	7	6	19.4	9	29	22.7	8
個別の指導計画の作成	23	23.7	7	3	9.7	17	26	20.3	9
個別の教育支援計画の作成	19	19.6	9	6	19.4	9	25	19.5	10
合理的配慮	18	18.6	10	6	19.4	9	24	18.8	11
学習指導案	17	17.5	12	6	19.4	9	23	18.0	12
教育課程	16	16.5	14	7	22.6	8	23	18.0	12
教科書の選定	13	13.4	15	8	25.8	7	21	16.4	14
関係機関、医療との連携	17	17.5	12	3	9.7	17	20	15.6	15
教科別の指導	12	12.4	16	6	19.4	9	18	14.1	16
ユニバーサルデザイン	9	9.3	18	4	12.9	15	13	10.2	17
保護者とのかかわり	10	10.3	17	2	6.5	19	12	9.4	18
子どもとの関係づくり	9	9.3	18	2	6.5	19	11	8.6	19
交流及び共同学習	8	8.2	20	2	6.5	19	10	7.8	20
校内支援会議・ケース会議	5	5.2	21	4	12.9	15	9	7.0	21
その他	2	2.1	22	1	3.2	22	3	2.3	22

※知的障がい教育を参考にしている特別支援学級担任の回答のみ（「特新担」37人+「3年目研修」11人=48人）を対象に集計

ニーズの把握に努めた。ただし、受講者の状況により、ニーズを細かく見ていく必要があり、この時期のアンケートは授業づくり等を含め選択項目を増やして実施した。

「今後知りたい」「参考にしたい」という項目について5つ以内で選択するようにした。表1から以下の気づきや考えに至った。

- ・知的障がいのある児童生徒の教育課程においては、知的障がい特別支援学校の教育課程を参考にすることができるため、指導の形態についての知識が必要となる。特新担受講者は特に項目「各教科等を合わせた指導」について、学びたいというニーズが高い結果が見られた(知的障がいのある児童生徒を担当する教員の70%以上)。特別支援学級担任の経験がある(「各教科等を合わせた指導」の実践がある)3年目研受講者は、特新担と比較して回答の割合が低くなっている。ただし、2つの研修を合わせた結果でも、一番のニーズとなっている。
- ・授業づくりに関連した選択項目を見た場合「各教科等を合わせた指導」に次いで「自立活動」が高い回答率となった。自立活動が必要であるということと、実践を積んでいる教員にとっても障がい種が変わったり、児童生徒が変わることで、実態把握による指導内容を設定する必要があったりし、経験を問わず個々の児童生徒に応じた指導について検討し続けることに不安を少なからずもちあわせている項目と判断される。3年目研受講者を含めた全体で見た場合でも2番目に高い回答率であり、ニーズの高さがうかがえた。
- ・項目「進路に関すること」は、いずれの受講者にとってもニーズが高いことが分かった。

- ・回答のあった割合に違いは見られたが、どれも不可欠な項目であり、回答を示さない項目はなかったことを考えると、受講者のニーズは多岐に渡っていると考えられた。

また、この調査では、当センター以外で参考にし、役に立った特別支援教育関係サイトとその内容についても調査を行った。記述式としたため、全員の記入ではないが、受講者それぞれが、インターネットからの情報収集をしていることが把握できた。(表2)

受講者が各都道府県教育センターや各学校、特別支援教育関連サイト等、様々なホームページに掲載されている「自立活動」や「教材・教具の工夫」等の情報を参考にしていることが分かった。

表2 集計結果(その2)

【アクセスした情報元】

情報元	特新担	3年目研修
内閣府	1	-
文部科学省	3	-
国立特別支援教育総合研究所(NISE)	2	1
各都道府県教育センター	4	6
各教育委員会	1	2
各学校(小・中・高・特・大学等)	4	2
その他(特別支援教育関連サイト等)	10	10

【検索内容等】

内容等	特新担	3年目研修
自立活動	4	5
教材・教具の工夫	7	10
「障がい特性の理解」に関すること	5	-
担任としての1年間の見通し	-	1
各教科等を合わせた指導	-	1
個別の教育支援計画の作成	-	1
合理的配慮	4	-
学習指導案	1	-
教育課程	1	2
ユニバーサルデザイン	-	1
その他	3	1



## 方法2によるニーズの把握

### ア 研修講師からのニーズの把握

研修の講師から受講者の様子を知るための手段として、研修当日に直接様子を聞く、講師による振り返り用紙からニーズをつかむという方法で把握に努めた。

把握できたことの一部を以下に示す。

- 各教科等を合わせた指導（生活単元学習等）についての考え方や具体をもっと知りたがっていた。特別支援学校による実践紹介の時間があり、良かった。
- 自立活動の理解が難しく、演習の時に困っていた。
- 子どもとの関係づくりについての質問があり、対応した。相談できる環境が少なく、孤独感を感じているようだった。
- 個別の指導計画や指導案の書き方に困っている。
- 教育課程の理解ができていない。知的障がいのない自閉症・情緒障がい学級で、各教科等を合わせた指導（生活単元学習）が行われている。

把握できたことの中には、気になることばかりでなく研修時の受講者の熱心な姿や、実践に前向きに取り組んでいる事もあった。これらの知り得た内容も、作成しようとする情報を決める上での根拠とした。

### イ 特専からのニーズの把握

特専（松江・出雲）との情報交換を行い、特別支援学級担任等の状況を共有することができた。研修を通じて当セクションがニーズと考える内容と同じく、教育課程の編成や個別の教育支援計画・個別の指導計画等の作成、学習指

導等で悩んだり、周囲に相談できず職場で孤立感を抱えたりしている状況があることが分かった。

### (2) 作成する情報の決定と考え方

作成する情報とその内容等は、アンケート調査や講師等から把握したニーズの結果を踏まえている。

8月実施のアンケート調査内での項目について、項目同士の関連を考え、大きな枠としての3つの分類を考えた。

それにより、「子どもとのかかわり」、「授業づくり」、「個別の教育支援計画・個別の指導計画」という3つに分けることができた。この分類に至った理由としては、全ての項目は、選択肢による回答の段階では単独であるが、3つの分類を関連づけると、どれも相互に何らかの関連があり、決して別々の事柄ではないという見方ができたことが挙げられる。

調査項目では、特別支援教育に関するキーワード的な項目として配列していたが、関連付けて捉えることができ、どれも必要不可欠な項目であると思われる。

児童生徒の指導・支援に項目すべてが関連し合っていることを図2に表したが、そこから今年度は、4つの情報としてタイトルをつけ作成することにした。

- ① 子どもをみつめる
- ② 自立活動ってなんだろう？
- ③ 各教科等を合わせた指導とは？
- ④ 個別の教育支援計画・個別の指導計画とは？

この4つの情報で、すべてのニーズへの対応はできない。しかし、少しずつ基本的な事項を扱う情報の充実を図ることで一人でも多くの

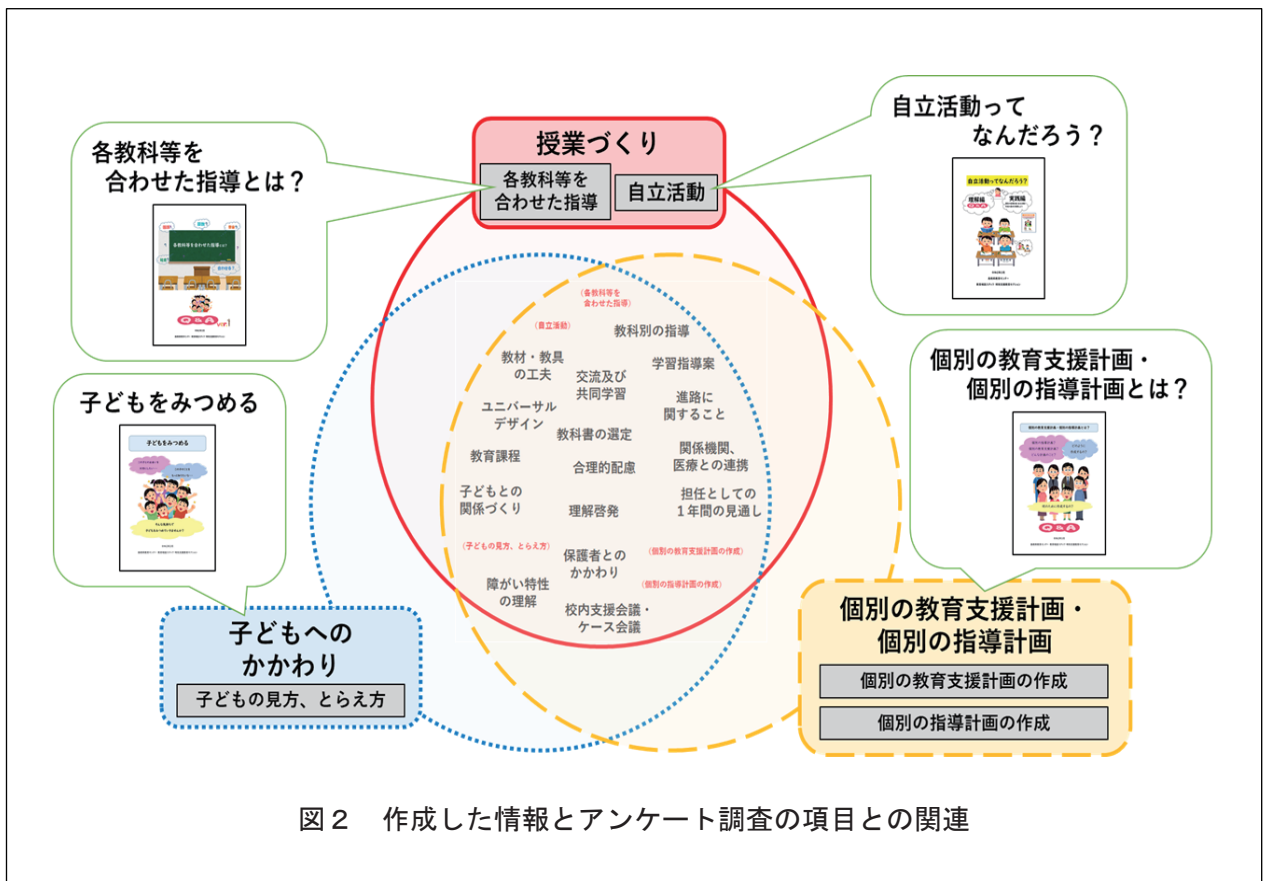


図2 作成した情報とアンケート調査の項目との関連

教員の不安軽減のツールとして活用してもらいたいと考えた。

加えて、これまでのホームページ上で公開していた、教育課程に関する情報（「特別支援学級の教育課程について悩んでいませんか？」）については、最新の内容を加え ver. 3 とした。

また、学習指導要領（小～高）の各教科等編全てに示された「障害のある児童（生徒）への指導」部分の記述を一つにまとめた情報等を同時に情報発信できるように作業を進めることにした。

### （3）情報を作成する上で大切にしたい視点

情報の仕上がりのイメージは、それぞれが独立したテーマ（タイトル）としてのテキストと

なる。しかし、活用する読み手にとっては、その内容が伝わりやすくなるよう、次のア～ウの視点を設定し、作成する上で共通の考慮すべき点を意識することとした。

#### 視点ア 基本的な内容を扱うこと

- ・基礎的・基本的な内容を精選する。

#### 視点イ 具体的な内容を示すこと

- ・事例や手続き等の解説を示し、具体的なイメージをもちやすくする。

#### 視点ウ 活用をしやすくすること

- ・学習指導要領等の内容をシンプルに示す。
- ・コンパクトに必要な内容を整理し、手軽に使えるようにする。
- ・研修等との関連を図った内容構成にする。

#### (4) 作成した各情報について

以下より、作成した4つの情報(①~④)についての詳細を記載する。

#### ① 子どもをみつめる

##### 【情報の概要】

「子どもをみつめる」では、教員の意識の持ち方に焦点を当てた。

- ・子どもの視点に立つこと。
- ・子どもの言動の奥にある背景に目を向けること。
- ・周囲の環境との関係にも着目しながら子どもを理解していくこと。等

上記に示した内容を扱った。そして、学習指導要領の他、当セクションが行う講座やこれまでの当セクションの取組を関連づけ、次のような構成で作成した。

##### ◎子どもの視点でみつめる

- ・視点を変えてみよう
- ・子どもの言動の背景をみよう

##### ◎障がいの捉え方

- ・子どもを取りまく環境をみつめよう
- ・子どもを知ること、適切な指導・支援の出発点にしよう

##### ◎事例で考えてみよう

##### 【情報を作成する上で大切にしたい視点】

#### 視点ア 基本的な内容を扱うこと

特新担の協議等では、「子どもに合った学習をどのように考えていけばよいのだろうか」

「一人一人に設定した目標は、本当に子どもに合っているのだろうか」等の相談がある。子ども一人一人の学習や活動のねらい、内容、適切な学習の場等をはじめ、様々な迷いや悩みをかかえ、現在行っている教育活動が実態に合っ

ているのか自信をもてない様子がうかがえる。それらの根底には、子どもの実態をどう捉えてよいか分からず困っている教員の姿があると考えられる。

子どもを理解する方法は様々ある。例えば、前学校(学年)の教員や本人・保護者からの聞き取り、かかわりながらの観察、検査等がある。どの方法をとる際にも、理解する側の意識の持ち方によって子どもの捉え方が変わってくる。子どもとのかかわりの中での悩みが少しでもよい方向へ向かうことを願い、教員の意識や姿勢にかかわる基本的な内容を2点取り上げた。

1点目は、子どもの言動の背景をみるということである。表に出ている言動だけに対応するのではなく、その裏に隠れた背景を見て対応することの大切さを示した。(図3)背景をみる視点として、子どもの特性、子どもを取りまく環境、これまでの生育歴等があることも示した。

(図4)

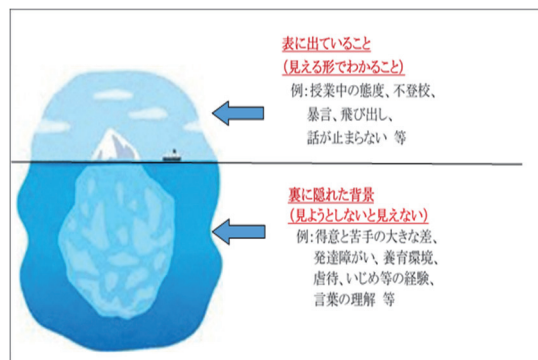


図3 氷山モデル

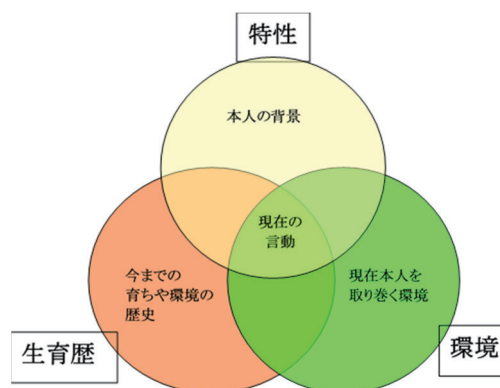
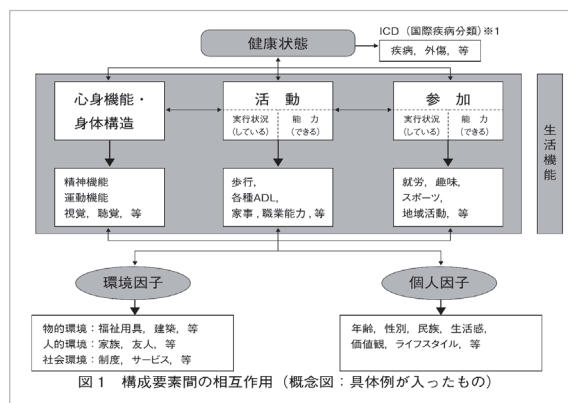


図4 3つの背景要因



2点目は、ICFの視点で障がいを捉えるということである。平成13年にWHO(世界保健機関)で採択された国際生活機能分類(ICF)の構成要素間の相互作用の概念図では、障がいの状態は、その個人の状況だけでなく周囲の環境等とも影響し合っていることを示している。(図5)子どもの言動を、本人に内在することへの視点と同時に、周囲の環境等との関係で捉える視点の大切さを伝えたいと考えた。



(出典) 厚生労働省大臣官房統計情報部編「生活機能分類の活用に向けて」  
 ※1 ICD(国際疾病分類)は、疾病や外傷等について国際的に記録や比較を行うためにWHO(世界保健機関)が作成したものである。ICDが病状や外傷を詳しく分類するものであるのに対し、ICFはそうした病状等の状態にある人の精神機能や運動機能、歩行や家事等の活動、就労や趣味等への参加の状態を環境因子等のかかわりにおいて把握するものである。

### 図5 構成要素間の相互作用の概要

どちらの内容も、説明の文はできるだけシンプルに短くして読みやすくし、最後にまとめの言葉を吹き出しで示すことで、大切なことがコンパクトな形で伝わるようにした。(図6)

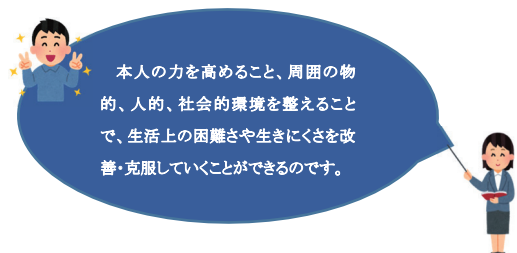


図6 まとめ吹き出し

### 視点イ 具体的な内容を示すこと

実際には様々な背景要因が複雑に絡み合う中、子どもを深く理解し適切な環境や支援を整えるためには多くの視点や専門性が求められ、簡単なことではない。

しかし、理解から支援の検討に至る過程を少しでも具体的にイメージしてもらえよう、背景要因として特に子どもの特性の部分に焦点をあてた6つの事例を示した。(図7)

- 事例
- 1 指示したことが伝わっていない様子で、活動に参加しません
  - 2 指示したことを最後までやり遂げることができません
  - 3 授業中の離席が多く、教室を飛び出します
  - 4 行動を切り替えることが難しいです
  - 5 集団の中に入るのが不安そうな様子です
  - 6 学習や活動に、意欲的に向かえない様子です

図7 事例

事例では、考える過程を図8の流れで統一した。困っている教員をイメージし、子どもの気持ちを考えたり背景を探ったりしながら支援を考えていく様子を具体的な言葉で表した。

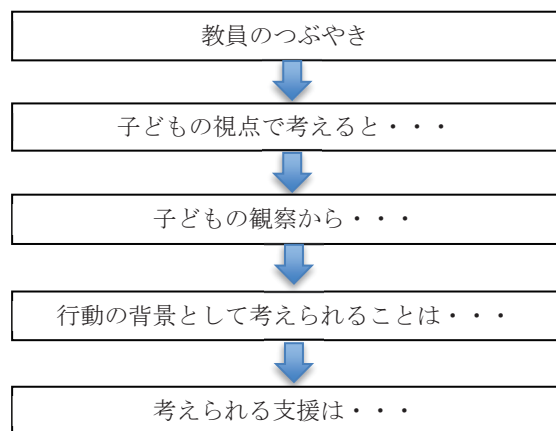


図8 理解から支援の検討までの過程

「子どもの視点で考えると・・・」では子どもの側から考え、「子どもの観察から・・・」では、ICFの視点で考える様子を会話の中で示した。一人よりも複数で考えることで、より子どもの理解が深まり支援のヒントをつかんでいく様子を感じ取ってもらえよう、2名の教員を登場させた。「考えられる支援は・・・」

の部分では、「～かもしれない」という語尾で統一した。決めつけではなく、子どもとかわる中で試行錯誤を繰り返しながら支援を行っていくものという思いからである。(図9)

**事例4**  
先生のつぶやき  
行動を切り替えることが難しいです

**子どもの視点で考えると…**  
・今はこれしたいという思いの強さから、終わろうとしても終われない。  
・指示が聞こえていない。  
・次に何をするのか、どこまでやったら終わりのかが分からない。

**子どもの観察から…**

興味のあること等に取り組み、すこし集中が得意。  
しかし集中しているときに指示をしても、気付いていないようなのです。

周囲の友達が次の活動に移っていても、気づかなかつたり気にならなかつたりする様子です。

活動の流れややり方がよく分かっているときには、スムーズに切り替えることがありますね。

**行動の背景として考えられることは…**  
・好きなことや興味のあることに集中すると、他のことに意識が向きにくいかもしれない。  
・周囲の状況や人に対する興味が薄いかもしれない。  
・活動の始めと終わりや順序など、活動全体をイメージしにくいかもしれない。

**考えられる支援は…**

行動の切り替えがしやすくなるよう、個別に声をかけ、切り替えるタイミングを本人と相談する。

うまく切り替える経験ができるように、本人の好きな活動を友達と一緒に楽しむ機会を重ねる。

活動に見通しをもてるようにするために、活動の流れやゴール、やり方等を目で分るように指示等で示す。

うまくいった状態を実感できるように、行動を切り替えられた時には、一緒に喜んで褒めたりする。

12

図9 事例

【課題】

「子どもをみつめる」は、教員の声から考えられる課題として、必要性を感じた内容にしたため、作成側の思いが優先されているのではないかと、ニーズに答えられているか、という懸念がある。今後、活用を通じた感想・要望等をもとに評価し、内容等の改善を行う必要があると考えている。また、事例を増やしたり、みつめる視点を加えたりするなど内容の充実を図ることとしたい。

今回は教員の意識にかかわる内容を取り上げたが、今後は、ニーズの高かった「障がい特性についての理解」も加え、より多面的な視点で子どもをみつめることができるような情報に整えていきたい。

② 各教科等を合わせた指導とは？

【情報の概要】

「各教科等を合わせた指導」とは、知的障がいのある児童生徒に行う指導形態であり、知的障がいの特性を踏まえた効果的な指導と考える。しかしながら、初めて特別支援学級を担任する教員や、知的障がいのある児童生徒の指導を任された教員にとって、児童生徒の実態に応じて、単元等、適切な目標設定に基づく学習活動を考えていくことは容易でないと想定する。特専による学校訪問の際に、「各教科を合わせる」というイメージがもちにくい、授業づくりが難しいと感じている担任が多いという現状を把握することもできたが、早期の段階で、基本的な考え方、教育課程上の位置づけ等、基本的事項の理解も求められる。

そこで、本情報では、学習指導要領を根拠とし、ポイントになる点を抜粋して示すことを基本とするQ&Aとし、シンプルに疑問に答えるようにした。また、それぞれの問いには内容関連ページを掲載し、学習指導要領で詳細も確認できるようにした。(図10)

**せて指導を行う」とは何ですか？**

、自立活動及び小学部においては外国語活動の指導を行うことをいいます。

P30

図10 内容関連ページの記載

【情報を作成する上で大切にしたい視点】

視点ア 基本的な内容を扱うこと

特新担、3年目研修では、互いの実践を紹介し合う時間を設けている。その際、「各教科等を合わせた指導」の実践では、実態の異なる一人一人の児童生徒について、どのような指導内

容にしてよいのか、何時間授業時数を確保するのかなどがはっきりしない上、校内の職員に相談することも難しく不安なままで日々過ごしながらの実践を語られる先生方が多いと感じている。

そこで、実際に受けてきた相談、研修後のアンケートの中にあつた記述をもとにQ&Aにした。その際、問いはニーズに合致した内容にすること、問いに対する答えをシンプルに表し、短い表現で解説を加えることにした。(図 11)

Q2 「各教科等を合わせた指導」とは教科名ですか？  
 A2 いいえ。教科名ではなく指導の形態のことです。各教科等を合わせた指導には日常生活の指導、遊びの指導、生活単元学習、作業学習などがあります。 P30

Q3 児童生徒には誰にでも各教科等を合わせた指導を行うことができますか？  
 A3 いいえ。特別支援学校で行う、知的障がいのある児童生徒に対する教育を参考にする教育課程の児童生徒に行うことができます。 P345

図 11 Q & A

視点イ 具体的な内容を示すこと

題材、単元の悩みはもちろん、日々の1時間1時間の学習活動について、「明日はどんな授業をしようか」と悩む担任は少なくない。そこで、実践例として小学校、中学校の例を実際の指導場面を取り上げてそれぞれ示した。(図 12)

その際、授業を通して児童生徒の興味、関心の幅が広がっていくような活動例となるように言葉を添えた。また、それぞれの学習活動には教科名も示し、「合わせた指導」とはどの教科等を合わせた指導なのか、イメージすることができるようにした。

【生活単元学習 小学校 学習活動例】 活動別の1つです。各教科等との関連も示すとこんな感じになります。児童生徒の段階※を考慮することも大切です。

クッキーを作って、交流学級の友達にプレゼントをしよう!!

○近所のクッキー屋さんに行ってみる。  
 生活:お店の仕事、「働く人」について知る。  
 国語:お店の人に何を聞くか決める。インタビューをし、メモをとる。  
 算数:購入するクッキーの値段を計算する。

○作り方を調べる。  
 国語:図書館の本で調べる。パソコンで調べる。  
 生活:司書さんにコピーを依頼する。

○ラッピングのデザイン等を考える。  
 国語:友達が喜んでくれるラッピングを考える。  
 算数:袋、クッキー、メッセージカード等適切な数やサイズを考える。

○材料を買いに行く。  
 生活:お店までの道順、バスの時刻等を調べる。  
 算数:電卓で計算する、お金を使用する。

○クッキーを作る、試食する。  
 生活:道具を安全に使う。衛生面について学習する。  
 算数:時間を計る、材料の重さを量る。  
 音楽:楽しく試食できるBGMを選ぶ。

○友達にプレゼントする。  
 道徳:友達が喜んでくれるように、感謝の気持ちを伝える方法を考える。  
 国語:友達にメッセージカードを書く。  
 国語:学級のトレードマークを消しはんこにする。メッセージカードに押す。

...まだまだ子どもたちの主体性と豊かな発想で学習が広がります!!

○学福での店をオープンする。店名を考える(国語)、看板を作る(国語)、注文書を作る(国語)、値段を決める(算数)、先生を招待するため、招待状を作る(国語)、など

生活単元学習の詳しい指導例は 島根県教育センターHP (特別支援教育のページ) をご覧ください。

※「特別支援学級の教育課程について悩んでいませんか?」  
 《島根県教育センター》p6, p16参照

図 12 学習活動例 (小学校)

また、教育課程上の位置づけ、ポイント等も参考になるように、「特別支援教育ハンドブック」、本セクションで作成した「教育課程について悩んでいませんか? ver. 3」との関連も図った。(図 13)

Q10 単元(題材)としてどのようなものが考えられますか?  
 A10 ・児童生徒にとって魅力的なもの  
 ・活動とテーマが直結していて具体的なもの  
 ・どの児童生徒にもできる活動があるもの  
 ・テーマに沿って活動を繰り返せるもの  
 ・期間内での発展が期待できるもの などがあげられます。 具体例 P47~

図 13 他の資料との関連

後者は、各教育事務所と協力して、情報を整えてきたという経緯があり、特別支援学級の学級経営概要を把握している教育事務所による資料を基にすることで、より担任の悩みに合致するものになるとも考える。

## 視点ウ 活用をしやすくすること

「各教科等を合わせた指導」に関する書籍は多々あるが、初めて特別支援学級の担任になった4月に、それを読み込む時間は確保しにくい。また、学習指導要領も厚みのある冊子であり、必要などころを探し出すには時間がかかる。

そこで基本的な内容を12に絞り、コンパクトにまとめることを視点に作成した。分量を考慮し、読みやすさ、見やすさを意識したのはもちろん、印刷をしてもかさばらず、困ったときに参考にできるQ&Aとした。

さらに、理論編と実践編に分けた。基本的な内容を理解した上で、実際に授業を考えてみようという意欲につなげてほしいという願いを込めた。研修（特新担）時の演習シート（「授業構想シート」）を実際に記入することで、担当する児童生徒の実態に合った授業を計画することができるようにした。（図14）さらに具体的な授業に生かせるよう、指導案サンプルとの関連も図った。

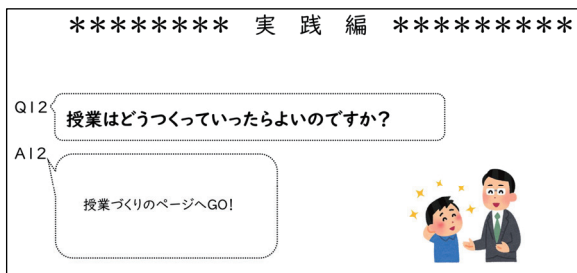


図14 演習シートとの関連

この「各教科等を合わせた指導とは？」は、特別支援学級担任だけでなく、全教職員に手にとっていただき、特別支援学級の児童生徒が、日々どんな学習を行っているのかの理解がさらに進むことも願っている。

## 【課題】

児童生徒の実態が多様な中、すべての悩み、質問にはなかなか答えられない。今回は問いの数を12に絞った。（図15）

目 次	
<small>小・中学校の学習指導要領では、教育内容を各教科等で分類しており、実際の指導もその分類に基づいて進められています。しかし、知的障がいのある児童生徒の場合、その学習上の特性としては、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場で応用されにくいことなどが挙げられます。また、実際的な生活経験が不足しがちであることから、実際の・具体的な内容の指導がより効果的であると考えられます。このような特性を踏まえ、特別支援学級の知的障がいのある児童生徒に対して効果的な指導を進めるため、各教科等を分けて、これらの一部又は全部を合わせて指導を行う指導の形態があります。「各教科等を合わせた指導」は、特別支援学校で行う知的障がいのある児童生徒に対する指導を参考にする教育課程の指導の形態です。ここでいう「各教科等」とは知的障がい特別支援学校の各教科等となります。</small>	
***** 理 解 編 *****	
Q 1	「各教科等を合わせて指導を行う」とは何ですか？……………1
Q 2	「各教科等を合わせた指導」とは教科名ですか？……………1
Q 3	児童生徒には誰にでも各教科等を合わせた指導を行うことができますか？……………1
Q 4	なぜ各教科等を合わせた指導を行う必要があるのですか？……………2
Q 5	各教科等を合わせて指導を行うことに法的な根拠は何ですか？……………2
Q 6	各教科等を合わせた指導の授業時数は、何時間設定するのですか？……………2
Q 7	一単元（一題材）につき、どのくらいの時間を割いたらよいですか？……………3
Q 8	各教科等を合わせて指導を行う場合に気をつけることはありますか？……………3
Q 9	各教科等を合わせた指導の他の指導の形態との関連はどのようになりますか？……………3
Q 10	単元（題材）としてどのようなものが考えられますか？……………3
	生活単元学習 小学校 学習活動例……………4
	作業学習 中学校 学習指導例……………5
Q 11	評価はどうしたらよいのですか？……………6
***** 実 践 編 *****	
Q 12	授業はどうつくっていったらよいのですか？……………7

図15 内容一覧

しかしどこまで内容を精選していくのか、その精選した内容は適切であったか等を考えると、さらに特別支援学級担任の声を聞く、特別支援教育支援専任教員等と連携を密に取り、情報の共有をしていくなど、工夫の余地があると考える。

また、具体例として、複数学級又は一人学級などの学級形態、小学校又は中学校の一方の校種に偏らないように配慮したが、そのため曖昧な表現になってしまったところもあるのではないかと考える。従って、示し方にはより工夫をしていく必要がある。

実践を知りたいというニーズに応えるため、授業例も掲載したが、一般的な例になっている。



今後さらに充実させていく必要性と、特別支援学級担任スキルアップ研修（5、6年の経験）対象受講者が取り組んだ課題研究について、ホームページ上で紹介することにより、「多くの実践を知りたい」というニーズに応えていきたいと考えている。

最後に、国の最新の情報などを得ながら更なる内容の充実を図り、情報を整えていくことを次の課題としたい。例えば今回、評価についての部分があるが、活動の評価、教科の評価、要録に記載するときの書き方などを明確に示すことができていると考えている。今後その表し方について研究し、情報発信をしていきたいと考えている。

### ③ 自立活動ってなんだろう？

#### 自立活動の内容整理表

##### 【情報の概要】

特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）平成30年3月（以下「解説自立活動編」という）では、改訂に伴い自立活動の指導目標及び具体的な指導内容の設定の手続きがより詳細に示された。

「自立活動ってなんだろう？」は、解説自立活動編から自立活動の重要さをより理解できるように、基本的事項を扱いまとめたものである。理解編、実践編と分けているが、理解編では、基本的事項をQ&Aとし、実践編は、指導計画作成の手順の解説としている。自立活動について理解が十分でない教員はまず手に取って読んでいただきたい。併せて「自立活動の内容整理表」もその中を見てもらい、実際に担当する児童生徒の指導を進める上で活用してもらいたいツールである。解説自立活動編第6章

「自立活動の内容」（pp. 50-102）を表として整理したものとして、区分ごとの観点、項目の意味、ある項目を中心として設定した具体的な指導内容例と留意点、他の項目との関連について、見やすくまとめたものである。

##### 【情報を作成する上で大切にしたい視点】

#### 視点ア 基本的な内容を扱うこと

「自立活動って何だろう？」の理解編（13ページ分）には、12の問いを扱った。（図16）

- |                             |
|-----------------------------|
| Q1 自立活動は、教科なのですか？           |
| Q2 自立活動の目標は何ですか？            |
| Q3 なぜ自立活動があるのですか？           |
| Q4 誰が自立活動をするのですか？           |
| Q5 自立活動は、いつ指導するのですか？        |
| Q6 自立活動の内容は、何がありますか？        |
| Q7 内容（6区分27項目）を全部取り扱うのですか？  |
| Q8 指導を考えるプロセスはどうすればいいですか？   |
| Q9 指導にあたって配慮することは何ですか？      |
| Q10 どのような指導内容を取り上げるのですか？    |
| Q11 評価はどのようにすればいいですか？       |
| Q12 他にどんなことを知っておく必要があるのですか？ |

図16 内容一覧

一つの問いに対して1ページ分のスペースを割いたQ&Aとしている。伝えたいポイントを絞ることで理解のしやすさ、見やすさを重視した。（図17）問いによっては、関連している事柄や理解のためのポイントを付け加える等して、基本的事項の理解の定着を促している。



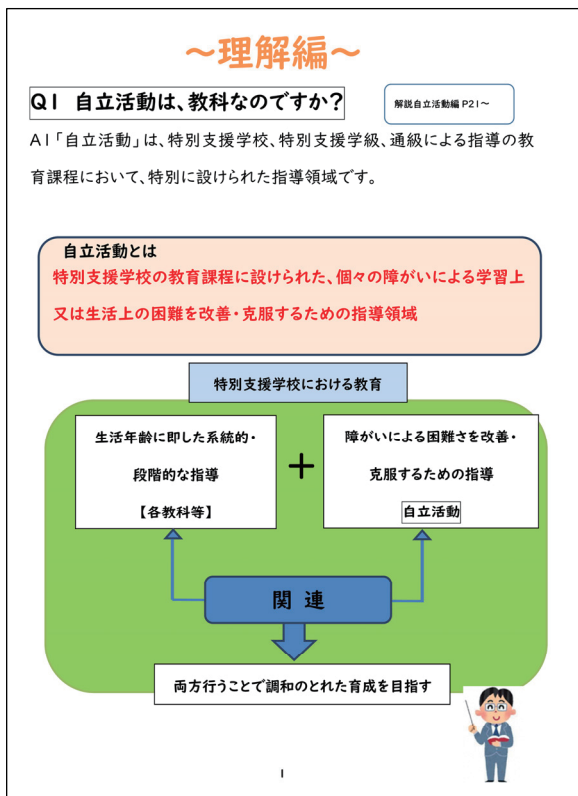


図 17 Q & A

**視点イ 具体的な内容を示すこと**

実践編では、指導場面を考えるまでのプロセスについて、二つの様式を扱った。根拠に基づいた指導を行うことが最も重要となるため、①実態把握→②課題の整理→③指導目標の設定→④項目（自立活動の内容）の選定→⑤具体的な指導内容の設定という、一連の手続きの理解を、具体的な例で詳しく示した。（図 18）

一つ目は、自立活動編で「実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れの例」として 13 事例示されている「流れ図」（本研究では、様式①とした）についての解説である。知的障がい（特別支援学校 中学部生徒）例を取り上げ、解説の方法として、様式内の記述内容の意図や根拠、記入の視点等を吹き出しで表した。（図 19）

作成した情報を理解することで、自立活動編の活用を期待したいと考えている。

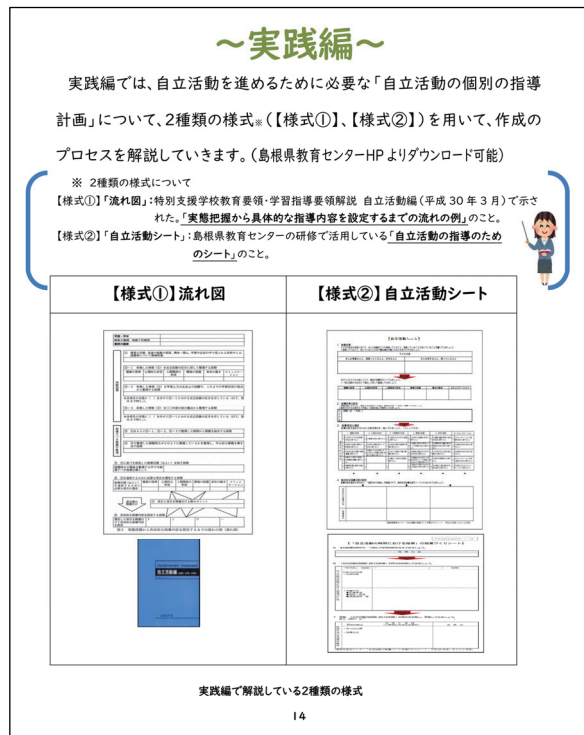


図 18 二つの様式

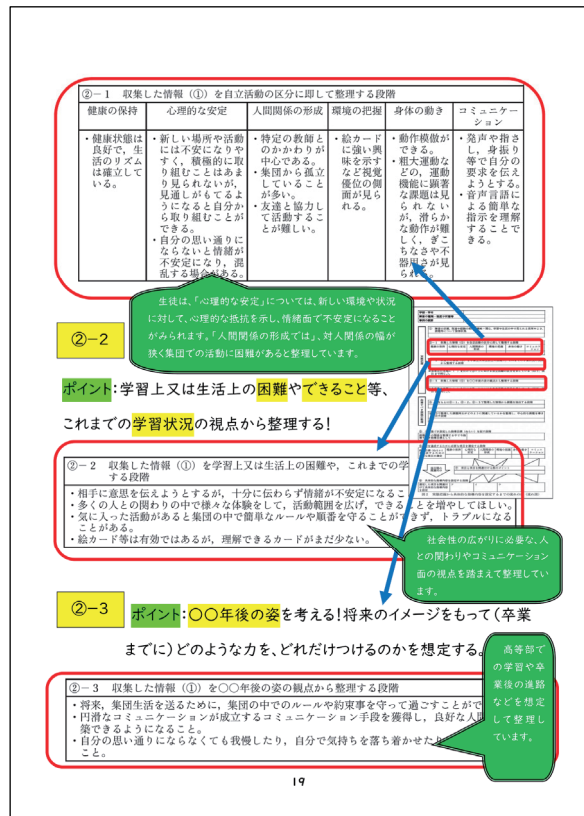


図 19 解説

二つ目は、自立活動の個別の指導計画を検討する上で、研修で活用している自立活動シート

(様式②)であり、シートを作成するときのポイントを示した。自立活動シートについては、記入例を含めて教育センターホームページからすでにダウンロード可能であるが、改めて解説書としての役目をもたせることができると考えている。

理解編と実践編を読むことで、自立活動の内容整理表の活用も必然となり、より実際の児童生徒の姿を捉えるための教職員の支援ツールになると期待したい。

### 視点ウ 活用をしやすくすること

「自立活動ってなんだろう？」と一緒に自立活動を理解し、対象児童生徒の姿を見ていこうとする手立てになるように、別冊関連資料「自立活動の内容整理表」を作成した。自立活動の指導を進めていく上では、自立活動の内容(6区分27項目)の言葉を知っているだけでは、それぞれの項目の関連を考えることは容易ではない。しかし、解説自立活動編を読み、理解していくにはとても時間がかかると思われる。そこで、解説自立活動編第6章(自立活動の内容)をより見やすく、実際に活用しやすいようにと考えたものである。工夫点として、

- ・第6章の構成と表記をそのまま引用し、27項目ごとにそれぞれ1ページ(2ページになった項目もあり)になるように整理。
- ・表に表すことで、障がいとその障がいの状況に応じた具体的な留意点、他の項目との関連を分け、見やすくと検索の容易さを重視。等を考えた。このため、項目ごとの理解や、障がい等の例示による具体的な児童生徒の姿がイメージしやすくなり、担当する児童生徒に関する情報収集や課題の選定がしやすくなると考えた。(図20)

3 人間関係の形成(3)			
観点	自他の理解を深め、対人関係を円滑にし、集団参加の基盤を培う。		
①項目	(3) 自己の理解と行動の調整に関すること。		
意味	自分の得意なことや不得意なこと、自分の行動の特徴などを理解し、集団の中で状況に応じた行動ができるようになることを意味している。		
障がい等	②具体的な指導内容と留意点/③他の項目との関連例		④他の項目との関連
	状況	指導内容や留意点	
知的障害	○過去の失敗経験等の積み重ねにより、自分に対する自信がもたず、行動することをためらいがちなことがある。	○本人が容易にできる活動を指定し、成就感を味わうことができるようにして、徐々に自信を回復しながら、自己に肯定的な感情を高めることが大切である。	
肢体不自由	○経験が乏しいことから自分の能力を十分理解できていないことがある。	○自分でできること、補助的な手段を活用すればできること、他人に依頼して援助を受けることなどについて、実際の体験を通して理解を促すことが必要である。	
ADHD	○衝動の抑制が難しく、自己の状況の分析や理解が難しくなり、同じ失敗を繰り返したり、目的に沿って行動を調整することが苦手なことがある。	○自分の行動とできごととの因果関係を明示して理解させたり、実現可能な目標を立て方や点検表を活用した振り返りの仕方などを示し、自ら適切な行動を選択し調整する力を育てることが大切である。	
	○経験が少なくて経験に結び難いなど、自己の理解がもたず、自己に肯定的な感情をもつことができない状態に陥っている場合がある。	○活動が消極的になり、活動から遠ざかることがあるので、早期から成就感を味わうことができるような活動を設定するとともに、自己を肯定的に捉えらるるよう指導することが重要である。	
自閉症	○自分の長所や短所に関心が向きにくいなど、自己の理解が困難な場合がある。また、「他者が自分をどう見ているか」、「どうしてそのような発言をするのか」など、他者の意図や感情の理解が十分でないことから、友達の行動に対して適切に対応することができないことがある。	○体系的な活動を通じて自分の得意なことや不得意なことの理解を促したり、他者の意図や感情を考え、それへの対応方法を身に付けたりする指導を関連付けて行うことが必要である。 ○特定の光や音などにより混乱し、行動の調整が難しくなることがある。そのような場合、声や触覚的な刺激の量を調整したり、避けてもらうなど、感覚や認知の特性への対応に関する内容も関連付けて具体的な指導内容を設定することが求められる。	○自己を理解し、状況に応じて行動できるようにするためには、この項目と「(2) 他者の意図や感情の理解に関すること」の項目などを関連付けるとともに、「A 環境の把握」等の区分に示されている項目などとも他項目に関連付けて具体的な指導内容を設定することが大切である。
本項目の指導の留意事項			
自己に対する知識やイメージは、様々な経験や他者との比較を通じて形成されており、障害のある幼児児童生徒は、障害による認知上の困難や経験の不足等から自己の理解が十分でない場合がある。			

図 20 自立活動の内容整理表

### 【課題】

学習指導要領や県外機関等の作成物を参考にしつつ、本センターの研修との関連をもたせた情報の作成ができた。今後の研修等での活用として、評価が期待できると考える。

しかしながら、自立活動に関しては、情報発信のみでニーズに対応できるわけではないと考えている。情報を活用する中で、しっかりと細かなニーズに丁寧に対応できるような意識をもたなければならぬ。

また、自立活動を進める難しさの一つとして校内体制がある。一人一人の実態等の情報共有をチームで進め、支援を検討して行く大切さを積極的に学校に届ける(発信する)方策を検討する必要がある。

研修での活用方法の検討を進め、次年度では評価を得ながら、実際の指導に生かせるものであるかを明らかにしたい。

#### ④個別の教育支援計画・個別の指導計画とは？

##### 【情報の概要】

今回の学習指導要領の改訂により、「小・中学校学習指導要領」（平成 29 年 3 月）や「小・中学校学習指導要領解説 総則編」（平成 29 年 7 月）では、特別支援学級に在籍する児童生徒や通級による指導を受ける児童生徒について、個別の教育支援計画および個別の指導計画を作成し、効果的に活用することと示された。また、通常の学級における、通級による指導を受けていない障がいのある児童生徒についても、この二つの計画を作成し、活用を努めることと示された。

これを受け、特別支援学級担任や通級指導教室担当教員、障がいのある児童生徒が在籍する通常の学級担任は、この二つの計画が確実に作成されていることを確認するとともに、実際に支援や指導を実施して評価を行い、計画を修正したり改善したりしていくことが必要となってくる。

この二つの計画に定められた様式はなく、各学校や市町村教育委員会等が工夫し、作成している。初めて特別支援学級担任等を経験する教員や経験が少ない教員にとっては、この二つの計画の作成と活用、評価等について、基本的な事項を理解できる道標のようなものが必要な場合もあると考えられる。

今年度の特新担受講予定者への事前アンケート集計結果では、不安に感じていることとして「個別の指導計画」の項目を選択した受講者が全体の 43.7%を示し、ニーズの高さがうかがえたのは前述の調査結果のとおりである。従って二つの計画についての情報の中で基本的な内容や、その扱い、留意点等を示すこととした。

#### 【情報を作成する上で大切にしたい視点】

##### 視点ア 基本的内容を扱うこと

「小・中学校学習指導要領」（平成 29 年 3 月）や「小・中学校学習指導要領解説 総則編」（平成 29 年 7 月）、「特別支援教育ハンドブック」（平成 23 年 3 月 島根県教委）を参考にし、Q&Aで13の基本的な質問項目から構成した。

##### （図 21）

- Q 1 「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」はどちらも作成しなければいけませんか？
- Q 2 「個別の教育支援計画」とは何ですか？
- Q 3 「個別の教育支援計画」を作成するプロセスはどうなりますか？
- Q 4 「個別の教育支援計画」の作成にかかわる関係者・機関はどのようなものがあるのでしょうか？
- Q 5 「個別の教育支援計画」の活用・評価はどのようにするのでしょうか？
- Q 6 「個別の指導計画」とは何ですか？
- Q 7 「個別の指導計画」を作成するプロセスはどうなりますか？
- Q 8 「個別の指導計画」の作成にあたっての基本的な考え方はどのようになりますか？
- Q 9 「個別の指導計画」の活用・評価はどのようにするのでしょうか？
- Q 10 「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」の違いは何ですか？
- Q 11 「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」は誰が作成しますか？
- Q 12 指導や支援を引き継ぐ際の留意点は何ですか？
- Q 13 「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」の様式にはどのようなものがありますか？

##### 図 21 内容一覧

また、読みやすくするため、各問いの分量があまり多くならないよう、シンプルな説明になるようにした。

##### 視点イ 具体的な内容を示すこと

「小・中学校学習指導要領解説 総則編」（平成 29 年 7 月）を参考にして作成しているが、

何が記載されているのかを分かりやすく伝えるため、質問項目を工夫して設定し、記載内容を把握しやすくなるようにした。

### 視点ウ 活用のしやすさ

二つの計画が混同しないよう、質問項目の配置を工夫した。

#### 【課題】

二つの計画の様式について、今回はその様式例や記入例を示すまでに至らず、具体のものを掲載することができなかった。

今後は、実際に各学校や市町村教育委員会等で使用されている様式も参考にしながら、可能な範囲で具体的なものを示していけたらと考えている。

#### (5) 情報の周知に向けて

前述の情報を含めて、今年度整えた情報は、以下の通りである。

- ① 子どもをみつめる (pdf)
- ② 各教科等を合わせた指導とは? (pdf)
- ③ 自立活動ってなんだろう? (pdf)  
自立活動の内容整理表 (pdf・Excel)
- ④ 個別の教育支援計画・  
個別の指導計画とは? (pdf)
- 障がいのある児童生徒への  
配慮についての事項 (pdf)
- 自立活動の流れ図 13 事例 (Excel)
- 特別支援学級の教育課程について  
悩んでいませんか? ver. 3 (pdf)
- 学習指導案 (様式例) (pdf)

3月中旬には、上記の情報を全てホームページにアップロードをすることができた。(図 22)



図 22 ホームページ上のイメージ

また、年度末にかけて県内の学校、関係機関等に対して、チラシによる周知を図ることができた。(図 23)

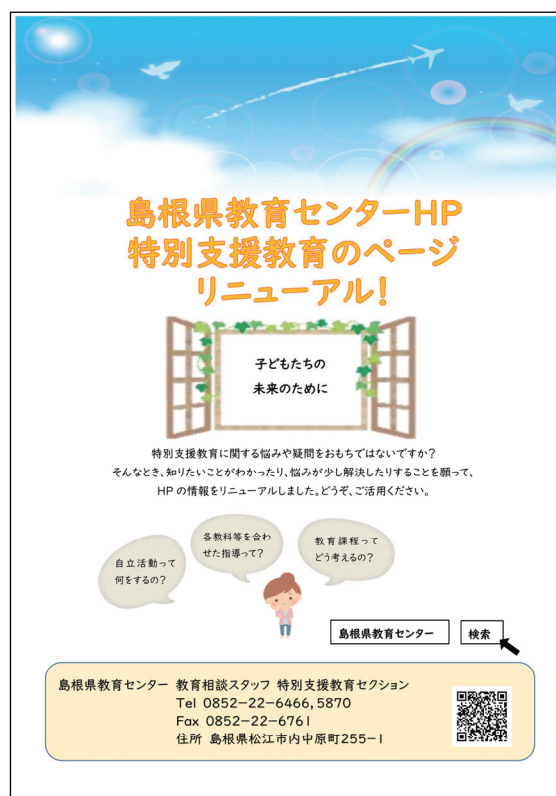


図 23 チラシのイメージ



アンケート調査対象の特新担、3年目研修受講者に対しては、メールにて、ホームページ掲載を知らせることで周知を図った。

## 6. 成果と今後の方向性

1年目の研究のまとめとして、多くの方の協力や助言を得ながら、作成した情報をホームページアップし、チラシによる周知を図ることができたことは、2年目の研究に向かうための折り返し地点への到達であり大きな成果とした。以下に成果と、課題を含めた今後の方向性について示す。

### 成果

○ニーズに対応するための情報作成

作成すべき情報を決定していく方法として、研修受講者からアンケートと、関係機関との連携によるニーズの把握としたことは、様々な視点からニーズを捉えることができ、情報を作成していくための根拠となり、より特別支援学級担任のニーズに対応する情報の完成につながったと考える。

○情報を発信する側の専門性の向上

編集段階では、関係機関に内容などを確認してもらい、より内容について分かりやすいものか、大切なポイントが押さえられているか等の助言を受けることができた。また記述した事柄について、正しく伝えるという視点から、その都度協議を重ね、執筆者自身（本セクション指導主事）の専門性の向上にもなったと考える。

### 今後の方向性

○研修等での活用と内容の充実

情報の周知を図ると共に、更なる内容の充実や必要に応じた改善を図っていくことが重要

である。具体的には、作成した情報を特新担等の研修テキストとして講義や演習の中で活用し、評価を得ることで、改善と内容の充実に努めていきたい。

○学校・教職員支援のツールとしての活用

出前講座、要請（申請）訪問等で、特別支援教育に関する研修を行う際に、情報の提供や必要に応じたツールとしての活用が考えられる。各教育事務所指導主事、特専との連携を充実させ、多方面からの活用も期待できるものとするためにも、情報の評価を2年次の取組としていきたい。

## 7. おわりに

情報の作成には、指導主事それぞれが分担したテーマについて作業を進めたり、幾度となく協議を重ねたりしながら多くの時間を費やしてきた。外部からの意見や助言を受け、筆者が気付かなかった事柄について考え、最善の応えを決めていく過程で、セクションのチームとしての一体感を得ることができたと考えている。自らの専門性について振り返り、自覚する機会にもなった。研修受講者をはじめ、本研究に対してご協力をいただいた全ての皆様に感謝したい。

なお、この研究は、教育相談スタッフ特別支援教育セクション共同研究として行い、竹下由香子、高梨俊美、蘆田美江子、原宗弘が執筆にあたった。

### 【引用文献】

- ・文部科学省『小学校学習指導要領』2017年
- 『中学校学習指導要領』2017年
- 『高等学校学習指導要領』2017年



『特別支援学校 幼稚部教育要領 小学部・中学部学習指導要領』2017年

『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編（幼稚部・小学部・中学部）』2018年

『特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（小学部・中学部）』2018年

『特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編（小学部・中学部）』2018年

『特別支援学校高等部学習指導要領』2019年

・島根県教育委員会

『特別支援教育ハンドブック』2011年

『教職員研修の手引』2019年

#### 【参考文献】

- ・国立特別支援教育総合研究所『改定新版 L・D・ADHD・高機能自閉症の子どもの指導ガイド』錦織圭之介 2013年
- ・名古屋恒彦『アップデート！各教科等を合わせた指導』東洋館出版社 2018年
- ・名古屋恒彦『わかる！できる！各教科等を合わせた指導』教育出版 2016年
- ・長崎県教育センター『特別支援学校の教育の手引き 第2集 障害のある子どもの理解編』2019年
- ・岡山県総合教育センター『「自立活動ハンドブックー知的障害のある児童生徒の指導のためにー』2015年
- ・福岡県教育センター『自立活動の授業づくり 手順モデルシート』2011年
- ・山口県教育委員会『自立活動の指導の手引き』2013年
- ・山口大学教育学部附属特別支援学校『自立活動指導内容表 作成ガイド（試案）』2018年
- ・熊本県立松橋東支援学校『自立活動プランマニユアル』2018年